『哲學研究』三十五年

『哲學研究』の發足

朝永三十郎

『哲學研究』が創刊されるやうになつた動機――といふ御尋ねですが、それは當時一部に囂さされてゐたやうに、京都側の新進の元氣を示してやらうといふやうな野心のわざでもなく、こちらの連中のあり餘つたエネルギーのはけ口を求めたといふのでもありません。京都の哲學科も創められておほよそ十年になり、教師の顔も一通り揃ひ、卒業生の數も次第に殖えて行くにつれて、其等の卒業生諸君及び教師自身の手習草紙といふ意味のものが欲しくなつた結果に外なりません。吾々の心持ちはこのやうに極めて地味なものでありました。

當時吾邦の哲學關係の雜誌には、東京に『哲學雜誌』、及び啓蒙的性格のものであつたが、『丁酉倫理』があり、こちらの文學部(當時文科大學と呼ばれた)には哲史文共通の機關誌『藝文』といふものがありました。それで、私達教師側の多數は前から東京と近しい關係にあつたから、論文の發表などにも別に不便を感じなかつたのですが、然し、段々殖えて來た卒業生諸君が諸面に才を伸ばして行くにはそれでは不充分であるといふことが感ぜられて來た。私達は手習草紙といふ詞をよく使つたものですが、この詞が一番よく『哲學研究』の首途に於ける吾々のベシャイデンな心持ちを表はしてゐると思ひます。このやうに、新雜誌發行の氣運は、何か特別な志向に基づくのでも、誰れ彼れの發意に俟つのでもなく、言はゞ自然發生的に成り立つたと云へませう。

もつとも、斯樣な動きに對して反對の意見が全くなかつたといふわけではありません。その一つは外部から來たもので、哲學がぬけては『藝文』がさびしくなる、といふのでありました。然し、哲史文の同居生活とでもいふべき、往昔の大家族制を思ひ出させるやうな狀態は、この大學の發展につれて早晩揚棄されて、哲學の史學文學よりの分家は避くべからざることであると考へられた。第二の反對は內部に見られたもので、一つは經濟上維持が困難ではないかといふこと、一つは原稿が續くかといふことでありました。此等の危懼は共に充分理由あることと考へられた。それで、第一の點については、書肆實文館に一應一任してみてもらふことに交渉が出來、第二の點に就いては、教師側は義務として年に一篇乃至二篇を必ず寄せること、卒業生も一定の範圍で充分努力することに話が決りました。これでどうしてもつゞかなければ何とも致方はない、原稿が集らなくても經濟がつゞかなくても雜誌の繼續は不可能であるから、出來るだけのことをして及ばなければ、事情を淡泊に公表してあつさり廢刊しよう、二號雜誌、三號雜誌で終つてもよいではないか、といふことに一致しました。

『哲學研究』が創刊されたのは大正五年春のことですが、當時、

哲學關係の同僚には、深田康算、西田幾多郎、小西重直、藤井健治郎、桑田芥太郎の諸氏があられた。みな大體同年輩で、就任時も極めて接近して居たから、年齢の相違や就任の前後などより來る氣兼ねや遠慮といふことも割合少なかつた。從つて、共同の問題についての相談などの場合、意見の分れることはあつても、結局はわだかまりなく、一致點に到達することが出來ました。『哲學研究』創刊のこともその著しい例の一つであると思ひます。

發足當初、會計には小西さんが當られ、編輯には暫らくの間私が關係した。然し、これは大體名義上に止まり、關係者はみな協同して責任を分つて與れられたのです。ことに、實際の盡力に於ても其後の研究發表の上に於ても、西田さんの大きな寄與については特に申述べるまでもありますまい。又編輯の運營については、當時美學教室の助手であつた槙田謙藏さんが、大切な研究の時間を割いて椽の下の力持ちの仕事に長い間辛棒して下すつた勞と努力に對して、深く感謝せねばなりません。

（文責　編輯者）

『哲學研究』編輯の思い出

高坂正顯

私が『哲學研究』の編輯のお手傳をしたのは、大正十二年四月から大正十五年一月までの、三年に足らない比較的短い期間のことであつた。丁度西田先生が『哲學研究』の編輯委員で、それまで務臺さんがやつてゐられたことを私がお引受し、やがて深田先生が編輯委員になられたので、私のあとを中井正一君に引繼いで頂いたのである。その短い期間の思い出のいくつかを次に記しておくことにしよう。

西田先生が編輯委員をしてゐられたのだが、先生は編輯のことについて別に指圖もなさらず、注意らしい言葉を口にされたことも全然なかつた。その頃はもう『哲學研究』もすつかり軌道に乘つた後なので、――それにかうした專門の研究雜誌のことなので、――編輯の上で特に工夫を凝す必要もなく、從來からの型に從つてやつて行けばそれでよかつた。それで苦勞と云へば、むしろ從來からの型を破らないやうにすること、例へば餘り哲學の論文とか、教育の論文とかだけに片寄らないで、毎號、二つ或は四つ位の、專門を異にする論文を集め單調に落入らないやうにするといふ類のことであつた。ただ困るのは、豫定しておいた論文が集らないといふことであつた。最初、務臺さんからお引繼ぎをした時、雜誌の編輯をしてゐると、いつも二三ヶ月先のことが氣にかかつて、普通の人よりもそれだけ早く時が廻つて來るといふ意味のことを云はれ、それはやがて身に泌みて直接に感ずるやうになつたのだが、それと共に務臺さんは、二つ三つ豫備の原稿を、萬一の場合の爲に用意しておくやうに、との注意を與へて下した。ところが豫定しておいた原稿が、一つならまだしも、同時に二つ、三つと當が外れ、おまけにそんなことが短い期間に反復されると、もうどうにもならない。結局自分で穴を埋めなければならない。ディルタイの「詩

的想像力と狂氣」や、ジンメルの「歴史的時間の問題」を大急ぎで飜譯して載せたのは、そのやうな穴埋めの爲だつたのだが、その時の苦しかつた氣持は、今でもはつきりと覺えてゐる。

原稿のしめ切りを一番正確に守つて下したのは西田先生であつた。約束の期間を違へることはなく、いつもそれ以前に渡して下した。それに反して一番苦勞した印象が殘つてゐるのは深田先生であつた。原稿を頂きに行くと、まあ上れと云はれる。下鴨神社の西側の、恐らく古い社家の家らしい、椽側の手すりのすぐ下は池で、鯉が澤山游いでゐる、と云つた類の家であつた。夏なぞは、當來のチーズがあるからと云つて、その椽側でビールを出して下さる。酒に弱い私はすぐ赤くなる。先生はよい御氣嫌で、丁度それにかかつてゐられたカントの判斷力批判の飜譯について私なぞの意見をもきかれる。それはよいのだが、結局、原稿はもう二三日あとで取りに來るやうにといふことになる。ところで二三日たつてお邪魔すると、また二三日延ばして欲しいと云はれる。そしてやつと頂いた原稿が、最初お約束の分量の半分位、ひどい時は三十枚といふお話が十二三枚位ほか出來てゐなくて、編輯の上で手を焼いたこともあつた。それは確かライプニッツの美學についての論文であつたやうに記憶するが、訂正やら書き込みの多い、實に推稿のほどの窺はれる論文で、それには頭の下る思ひがした。

原稿の點で、他に深い印象が殘つてゐるのは、不慮の死をとげた三土興三君の、ヘーゲルの現象學についての論文である。これは同君の卒業論文の一部をなすものであり『哲學研究』に載せることを同君はむしろ進んで希望してゐた。ところがそのうち原稿を渡すのを澁り出し、終りには、全部を一度に發表してくれるなら渡すなぞと、難題を吹きかける。どれだけの分量かときくと、細字で一杯につまつた一册のノートをとり出してこれだと云ふ。一寸見ただけでも、『哲學研究』の一册分を超過しさうな分量である。しかしその時の話の勢もあり、結局その原稿をとりあげて一度に發表したことがあつた。何月號であつたか記憶がないが、同君の論文だけで、普段の號よりも厚いものになつたやうに覺えてゐる。

同君が突然死んだのは、それから半年位後のことではなかつたか。ヘーゲルをやつた同君は、段々ヘーゲルに嫌らなくなり、戀愛問題なぞもあつて、キェルケゴールに心を惹かれてゐた。キェルケゴールの「恐れと戦き」を飜譯してゐるとも云つてゐた。しかし同君の死後、書物の整理なぞをした時、かなり探してみたが、他の原稿や日記と一緒に焼き棄てて了つたのか、見つからなかつた。

これは原稿のこととは關係はないが、『哲學研究』のことを想ふと、私には實巖さんといふ老人のことが思い出される。その頃の研究室は、今はすつかり跡かたもなくなつた木造の二階建の建物で、下の廊下にはデカルトなぞの肖像がいくつかかつてゐた。その入口の階段を登つたとつつきの處が西田先生の研究室で、その隣りが藤井健治郎先生の研究室であつた。藤井健治郎先生はいつも研究室に來てゐられたが、西田先生は研究室

を使はれることは全然なかつた。本らしい本も置いてなかつた。ところがその部屋に頭の禿げた大柄な老人が机を持ち込んで、帳簿の整理などをしてゐた。それが實巖老人で、昔はどこかの中學の先生か校長かをしてゐたのださうだが、哲學に憧憬を有ち、何かの手づるで京都哲學會の會計事務を擔當し、獨身の餘生を送つてゐるのであつた。『哲學研究』は京都哲學會の發行といふことになつてゐたので、原稿料などもこの實巖老人が送つてくれてゐたと思ふ。原稿料と云つても一頁五十錢で、社會學の米田先生が、せめて參考書の二三册は買へる程度でなければ若い諸君には强いて書いて貰つても氣の毒だと云はれたりする程度であつた。

ところがこの實巖老人に、一年に一度の樂しい時があつた。それは哲學會の公開講演會のあとで、先生方も出席されて、簡素な晩餐會が、學生集會所で行はれる習慣になつてゐたが、その時なのである。洋食の嫌ひな老人は、自分だけ特別の和食のお膳を用意させて、諸先生の末席につらなつてゐる。そしてそのことを決つて辨明するのだが、そこには自分が特別の横利を認めて貰つてゐることの喜びと、また西田先生始め諸先生と同席してゐることの誇りとが、蔽ふべくもなく窺はれて、それを見てゐることが私には嬉しかつた。この老人のことは、どなたか書かれるかも知れず、私も實は詳しくは知らないのだが、今から考へれば、いかにも明治の人といふ感のする人であつた。

後にこの老人は、尿毒症かなにかで倒れ、獨身の寄邊もない身なので、大學病院で世話を受けてゐた。多分官費であつたのだらう。ところがどうした譯か、藥をいやがつて呑まうとしない。そんな噂を事務室の田中さんか誰かからきいて、お見舞したことがあつた。大分に病勢も悪化してゐたやうであるが、私が尋ねてあげたのを大變に喜んでくれ、吸口から藥をのましてあげたら、素直にそれをのんでくれた。『哲學研究』の內容とは關係はないが、こんな老人がゐたことが、『哲學研究』の編輯といへば、私にはやはり思い出されてくる。

回顧十年

——思ひ出づるまゝに——

中井正一

京都を思ふとき、殊に學界に關して、思出でられるのは、あの紅の森の、ひき込まれるやうな寂けさの中で、默つて煙草を吸つてゐられる深田先生の前に、こちらも默つて、座つて、問うべき言葉を腹の中でもんでゐたあの下鴨の先生の部屋の事である。

今でも、事が、學問の事となると、いつでも、あの畏るべき、沈默の中に、とまどふ思ひがする。學問が畏るべきものであることを、ホビヤの樣に躾けられたのは、あの部屋であつた。あの部屋で、

「今度、自分が哲學研究の編輯を見ることになつたから、君その事務を取つてくれないか、高坂正顯君から、いろいろ教は

つて引次いでくれ給へ。」

と先生から云はれたとき、大正十四年、未だ卒業したばかりの私には、それがいかに重大な學界の責任を負はされたのか、何も知らずに、只つゝしんで命を受けたまゝであつた。爾來十年間、博士の歿後も、數代の編輯主任につかへながら、夢の樣に過した。昭和十二年の反ファッショ運動斷壓に連座し、中立寶署の特高主任の室で、いろいろの辭表を書くとき、この哲學研究の辭表だけはつらかつた。こんなに自分の骨身に喰込んでゐたかと、ひそかに涙ぐんだ。

この十年間の、京都の學界は、まことに百花燎爛のときでもあつた。西田、深田、朝永、波多野、藤井、小西、松本の教授陣に配するに、少壯氣鋭の助教授講師陣、天野貞祐、田邊元、和辻哲郎、山内得立、植田壽藏、小島祐馬、九鬼周造の諸先生が星の如く輝いてゐたのである。第一陣に三木清、戸坂潤、西谷啓治、高坂正顯、木村素衞君等が、第二陣に下村寅太郎、高山岩男、眞下信一、淡野安太郎君等がこれ等の先生達の宅に集つて、各々論敵となつて火花を散らしてゐた。田邊博士の土曜日の訪問日は、きらびやかなゼミナールにも等しかつた。今から思へば、私はこの星や雲の中を、縫ふ樣に樂しく生きたとも云へる。

その頃の教授陣は、西田先生を除いては、妙に酒豪のそろひの樣であつた。殊に、深田、朝永、波多野の三先生は、正月は定まつて酒宴をされる仲であつたらしい。糺の森で羽織をなくしたり、塀を越えて家に歸る位の酒量でもあつたらしい。

深田博士の訪問日は水曜日であつた。議論の調子がよい日は、初めがブドウ酒かジン、次がビールの小ビン(これも數本)更に日本酒の順序で、夜が更けて行つた。博士は酒がまわらないと、他人の批判をしない人柄であつた。哲學研究の內容の批判などは、お互に醉ふほどに、やがて、いつもお小言ばかりをうけたものであつた。「西田君の Wirbel はね…どうも」などと鋭い言葉を伺つても、その頃は、その意味がハッキリ判らなかつた。しかし、今も尙、この言葉は、頭の中にこびりついて離れない。博士の絶筆として哲學研究に再錄した「アミエルの日記の一節」にある樣に、「私の常住陷つてゆくものは內に向けられたる懷疑、それのみである。私の愛するところのものは眞面目より外ないのに、私は私の境遇を、加之私自身をさへも、眞面目に取扱ふことができないでゐる。…一言にして云へば、私は私自身の中に自己を永遠に嘲罵するところのものを抱へてゐる。」と云うアミエルの言葉は、博士自身の言葉でさへもある。

「こんな心持は、今、君達の年齡では判らない。しかし、いつか判るときが來るよ。」と博士はよく云ひきかされたが、漸くこの言葉が判る年齡に私自身がなつてゆき、そして、この言葉が、今、身にも泗みて來るのである。

十年間の編輯で思出とならない論文はない位、一つ一つ精選もし、又惜まれもした。中でも戸坂君が、兵隊の現役に就役中に、宗間論の論文を隊の中から書いてよこした時ほど、深い感に打たれことはない。それは人間のエネルギーの考へられない

位の努力によつて果された研究と云ふべきであつたらう。三木君が、ドイツ留學中に送つてよこした「間の構造」と云うテーマは、その嶄新さに於て、私達は驚倒したものであつたが、ハイデッガーの Sein und Zeit が數ヶ月後に手に入つて見ると、そのプレリュードの樣なものであつたのは、何かくやしい思ひをしたものである。その位、その頃の學界は、三ヶ月を爭うほど、學界の進みの動きがあつたのであつた。東京に敗けまいと云う若いもの達の張氣は、日に日に進むこの學界の勢を反映してゐたと云へるのである。

この十年の編輯の中で、私をして未だ、その結果がついてゐないと思はしめるところの論文が一つあるのである。これは、第十五卷、第五册、第百七十號、田邊元博士の論文「西田先生の教を仰ぐ」である。以下少し迪つて回顧のたぐさとしたい。

「宗教的體驗は超歴史的であり、哲學的反省は歴史的相對的である。固より歴史的なるものは超歴史的なるものの上に成立し、相對的なるものは絶對的なるものを豫想する。併し契機として現はるゝ絶對的なるものは單に微分的に止まり、その全體はたゞ之を媒介にして求められたるに過ぎない。歴史的なるものゝ基底として豫想せらるゝ超歴史的なるものは、たゞ歴史的なるものゝ方向の中に含まるゝ微分であつて、後者を通じて無限に求めらるゝイデーに外ならない。然るに哲學を宗教化することは此區別を沒し、單に極微の方向動性としてでなく積分的全體として、超歴史的絶對的なるものを體系の principium とし、その限定に由つて歴史的相對的なるものを秩序附け組織することに歸着する。私が西田先生の哲學に對して懷く根本の疑惑は此點に關するのである。」（一二―一三頁）

「然るに西田先生の體系に於ては、意識一般、或は之をその知的形態とする叡智的自己は、一般にイデヤを見るものとして絶對的に考へられ、その歴史的被制約性といふ如きことは認められて居ないやうに思ふ。」（三八頁）むしろ「哲學は一層非完結的なる立場を守り、唯絶對的なるものへの極限的關係に於て反省せられる無限の動性に住し、その非完結的缺隙の故に却て行爲に於て現實に處する生命の力を宿すものではないであらうか。働くことを見ること」に吸收し盡すことは斯かる哲學の本意に反する。」（四〇頁）

この田邊博士の師に對する肉迫と對決を、私達は悲壯なる思ひをもつて、見まもり、息をのんだのであつた。

西田博士は、しかし、默して答へられなかつた。ついに最後まで答へられなかつた。そして、翌年の七月、本誌第百八十四號は、その答へであるかの如く、「絶對無の場所的限定として自由なる人といふ如きものが限定せられ、それは無にして自己自身を限定するものとして、我々の自己は自己の中に時を包み、各人は各人の時を有つと云うことができる。」（八頁）そして、パスカルの神の、「周邊なくして到るところに中心を有つ無限大の球」に似た「絶對無の自覺的限定といふのは周邊なくして到るところが中心となる無限大の圓と考へることが出來る」（九頁）と云つて、輕くあしらはれたのである。

これに對して、田邊博士は決して滿足されなかつた。むしろ

毅然として、昭和十二年十月、論爭が起つて七年半の後、第二百五十九號、「種の論理の意味を明かにす」で、更に問を續けられてゐるのである。（この號の編輯の直後十一月七日私は斷腐を受けて、哲學研究を去つたのであつた。）

「西田先生が無の場所を說かれた當時から今日まで既に十年の歲月を閱し、其間に先生の思索は愈々深さと精しさとを加へて、嬭然たる體系を建設せられつゝあるが、併し私はこの仰視すべき先生の體系の根柢に就いて、初めから今に至るまで依然として疑問を懷くことを如何ともし得ないのである。それは、絕對無が直接に體系の根柢として、所謂無の場所として、定立せられる限り、最早それは有であつて無ではないのではないか、といふ疑問に外ならない。」（五八頁）

この論文は、氣迫のこもつた、必死をかけた感じのするものであつた。こゝで博士は「體系」なるものに對して、「行爲の媒介」なる概念を定立された。

「體系は其中から實踐を發出することが出來るものではない。若し假に實踐を體系が包容するならば、實踐は最早實踐でなく觀想されたる實踐の概念に止まらなければならない。却つて逆に、實踐が行はれ、存在と理性とが否定的に合一せしめられた其瞬間に於ける、理性的存在の論理的秩序が、卽ち體系の內容を形成すると思惟すべきであらう。」（四九頁）「體系は各々の現在に新なるものであつて、相互の間は非連續である。」（五一頁）かくして、「表現解釋の存在論に行爲の占むべき餘地は無い。行爲は斯かる表現的存在を否定する所に成立するものだからである。實存哲學に於ける無が解釋せられたる無であり、行爲は決斷の可能に止まる所以もこゝに存するであらう」（六四頁）むしろ、「行爲の媒介が肯定否定の間を統一するによつて、論理の概念が存在の形成原理となる」（四二頁）のである。

この論文は、ファシズムに反對して、政治實踐に行爲をもつてつつ込んでゐた少壯の學徒にとつては、一つの大いなる示唆の意味すらもつてゐた。

この論文の校正を最後に、三年間自由を失つてゐた私は、何かのつてゞ、哲學研究を手にする機會もあつた。しかし、それも斷續してゐて、そのあとを追ることが出來なかつた。學界よりの追放、俗塵への顚落、更に私は遠く京都の地を流離してしまつた。しかし、まことに感慨に耐へない瞬間をときどきもつのである。

その後田邊博士のあのボンボンダリヤの體系の論文を讀み、その前後の論文の脈絡を未だ詳かにしてゐないが、私は今も尙あの昭和十二年に博士が西田博士に提立されたる疑問のテーマは、西田博士も答へられず、その學派も解き切つてゐるとは思つてゐない。哲學研究誌上に空白に殘つてゐる大いなる頁である。そして、その空白は、「媒介」なる概念が、Medium かvermitelnのMittelかを問うてゐるところの巨大なる疑問符を物語つてゐる。そして、もし、十二年の田邊博士のあの論文の主意が今、更に生きてゐるとしたならば、行爲して、無に躍入した三木清と戸坂潤の死は、田邊博士の所謂「否定の深淵を越えさせる何等かの媒介」（五七頁）として、この空白に行爲をも

つて答へてゐる數行であるとも云へよう。

行爲なるものが、決して、容易に口にすべきものでないことをも亦私達に敎へてもゐるかの樣である。

私の生きた京都學界の十年の故に、私が京都學派であるとするならば、私はこの燎闊たる分裂の、この學派を名譽としたいと思ふのである。京都學派は、人々の云ふごとく一部のものではない。それは決して、固定した一つのものでなく、輝く光芒を引いてゐる、巨大な、一つの流るゝ星であることを回顧したいのである。（一九五一年一月）

回顧

服部英次郎

『哲學研究』が創刊されたのは、たしか大正五年の四月で、創刊號の卷頭には西田先生の『現代の哲學』がのつていたと思う。大正五年といえば、例の岩波の『哲學叢書』全十二册が出た頃で、哲學がはじめて廣く一般人士の學問的關心の對象となつた時代であり、また京都大學文學部が創設後十年餘を經て、特にその哲學科が目覺しく學界に進出した時期であつたろう。もつとも、それまでにも、文學部全體の機關誌として『藝文』があり、西田先生の『自覺に於ける直觀と反省』なども最初はそれに連載され、わが國の代表的學術雜誌として斷然光彩を放つていたが、『哲學研究』『史林』などの獨立後、リア王の運命を免れず、われわれが學校を出てから間もなく完刊（終職など

といふ表現と似ているようであるが、よもやそうではなかろう）した。それはとにかく『哲學研究』は、戰中、戰後の混亂を切り拔けて、この二月には第四〇〇號を出すという。哲學專門の雜誌で月刊というのは、日本以外には全く例のないことであり、いまもなおその立前を堅持している點では、世界を通じて唯一無二といえるであろう。これは、われわれの學生時代からの習慣であつたと思うが、大體毎月一册に、なんの關聯もない論文三篇をのせて出すといふ編輯も獨特のものであろう。このような超時代感覺の學術雜誌がこんにちなおつづいているということは、現在の委員諸氏の非常な努力によること」と思うが、また次々に力作を寄せられた先生方とそれを待望される讀者との熱烈な支持に負うところが多いと思う。「哲學研究」創刊以後について見ても、哲學に對する關心はなんども流行的にたかまり、またなくなつた。世間の關心という點では、いまはどん底にあるのかも知れないが、それだけにかえつて、專門學者の着實な研究の行われるべき時期である。『哲學研究』はこれまでいかなる主義をもかかげなかつた。特定の主義を奉じるものは、その門には近づかず、あるいは旗をまいて入るのがつねであつた。新制大學の發足とともに、全國にずいぶん多くの機關誌が出ているようであるが、わが『哲學研究』は、どこまでも全國的な純研究發表の機關としてもり立てて行かねばならぬと思う。ジャーナリズムとアカデミーとの區別ということもなかなかむつかしい問題であろうが、あのプラトンのアカデミ創設の意圖などから考えても、眞實のアカデミは決していわゆるア

カデミックではないはずである。ほんとうに政治を動かす力は、もつとも政治的でない學問的活動から起るのでなければならない。

さて、昭和七年『哲學研究』が第二〇〇號を出したとき、當時文學部圖書室に勤務していたわたくしは、編輯委員の中井正一氏から委囑されて、創刊號からの總目次を附けた。そういうえんこもあつてか、翌八年、たしか野田又夫氏のカントに關する卒業論文をのせた號から委員の末席に列り、田邊先生の御指圖を受けて主として庶務會計の方を擔當した。そして十二年冬、中井氏退任の後は、上野照夫氏の助力を得て編輯委員となり、十六年春神戸の學校に赴任するまでその仕事をつづけた。滿洲事變から日華事變へ、それからさらに太平洋戰爭へと、時局は目まぐるしい轉向を遂げたが、毎月三篇の論文を苦勞して集めることが課せられた仕事のすべてであつた。當時は、岩波の『思想』などを除いては、純哲學論文をのせる雜誌はすくなかつたが、それでも有力執筆者はポリティカル・ジャーナリストとしての活動に忙しくて、原稿の集りは甚だ悪く、また會員も次第に減少して、經營困難にたちいたつた。その間、わたくしどもの監督をして居られた田邊先生には、ここで申上げられないような點にまで、色々御配慮して頂いた。『哲學研究』の發行所は、寶文館、內外出版、弘文堂と三代になることと思うが、當時『西哲叢書』で目覺しく進出して來た弘文堂に引きつがれることになつたのも、このような事情によるのである。

西田先生晩年の御勞作は、大體『思想』と『哲學研究』とに發表されたが、わたくしどもの頂いたものには「辯證法的一般者としての世界」、「實踐と對象認識」などがあると記憶する。こういうことを書いては失禮かとも思うが、先生の論辯が熱して「であるのである」が三回以上にもなつているとき、植字工はたいてい二回で御免をこうむつていた。田邊先生には昭和九年から毎年秋「社會存在の論理」、「種の論理と世界圖式」、「論理の社會存在論的構造」、「種の論理の意味を明にす」などと次々に雄篇を發表され、昭和十二年に及び、翌十三年には「永平正法眼藏の哲學」を寄せられた。波多野先生の「愛」、山內先生の「アナロギア思想の位置」、九鬼先生の「驚きの情と偶然性」なども私の記憶に殘つているが、初代の編輯委員であられたと承る植田先生は特に御熱心で、次々に玉稿を頂き、またなにかと御注意を賜はつた。私どもの直接の先輩ないしは同學の木村、高坂、西谷、臼井、下村、島、長澤、高山諸氏も着實な研究を發表されたが、當時東京に居られた田中美知太郎氏の「プロトレプチコス」と藤井義夫氏の長編「アリストテレスの研究」とは、『哲學研究』として特色ある論文であつたろう。現在、京大哲學科の中堅として活躍していられる野田、井島、上野、松尾、武內、保田諸氏の處女作が發表されたのも本誌であつたことはいうまでもない。

なおこれはいまも繼續されていることと思うが、京都哲學會の事業には、『哲學研究』の發行の外に、毎年秋の公開講演會があつて、あの廣い法經第四教室が滿員になるのが常であつた。私どもは、すでに三高生のころから、この講演會に出て、

わからずながら耳を傾けたものだが、私の記憶するかぎり、もつとも盛會であつたのは、昭和十二年（日華事變勃發の年）秋の田邊先生の「現實について」と高山氏の「表現について」ではなかつたろうか。榮蓋失調にかかつていたころの記憶はさだかでないが、それから七年後、多分敗戰前年の冬同じ教室で行われた田邊先生最後の御講演「メタノイア」のことを思うときそれはなんというコントラストであろうか。

わたくしどもの時代に、雜誌の卷末に海外學界の消息や新刊書目を附したが、これは雜誌の品位を傷けはしなかつたであろうか。當時は研究室といつても、ただ名稱だけであつて、田邊先生の特殊講義の時間の後に、隨所に開かれるという風であつたが、これからは、若い卒業生諸君のなまの研究などもどしどしのせて頂きたい。哲學という學問の性格からしてかならずしも容易ではなかろうが、共同研究というようなものもあつてほしい。そして綜合大學なのであるから、法、經、理各學部の少壯學者との連携がなによりも大切である。ただ、哲學をやればなんでもわかるという態度だけは禁物であろう。外國書の移入は、むかしから、そして戰後もまたその傾向が見えはじめたが、ある特定のルートによるものが多く、そしてそれがM書店などに並び、こんにちも古書店にころがつているしまつであるが、かつての『哲學研究』にのせた新刊書目は、外國から直接得られた資料に基づいて、あまり人目につかないものをものせることができたと信じている。特に大切なのは、全集叢書雜誌などの繼續出版であつて、その都度取り揃へておかなければ、それの補充に數ヶ年の日時と豫算とを要するというようなことになるだろう。この點、私自身の經驗からして、研究室をあずかつていられる若い方々に注意しておきたい。しかし卷末の雜錄だけが讀まれて、論文は文字通りに敬遠されるというのでは、雜誌發行の意味はない。京都大學哲學科卒業生は數からいつても相當なものであるから、こぞつて『哲學研究』を購讀し、それに研究發表して、すでに四〇〇號に達した同誌存在の意義をますます高めて行かねばならぬと思う。（一・二七）

編輯の思い出

澤瀉久敬

ほとんど毎日外出した。それはたゞ約束の原稿を貰ひに行く爲だけではない。新に執筆を依頼しなければならぬ。二月先、三月先、半年先のことが氣になるし、一度だけお願ひしておけばそれで期日に入手出來るといふものでもない。それに編輯委員の田邊先生に御意見を伺はねばならぬことも次々に起つてくるし、一緒に仕事をしてゐる上野君と相談したいことも色々ある。勿論、印刷その他に就て弘文堂へ足を運ぶことも必要である。こんな譯で、殆んど毎日『哲學研究』の編輯の爲に外出した。一番多い日には一日に八人の方を訪問したことがある。またそれ以外に手紙や速達や電報を書かねばならぬし、出しにも行かねばならぬ。校正が廻つてくれば翌日の講義が氣に懸り乍らもそれを濟まさねばならない。自分自身論文を書くことを斷

念するだけではなく、生活のゆるす限り就職もせぬやうする他はなかつた。併しそれは編輯をお引受した時、既に決心したことであつた。

昭和十五年の暮の或る日、田邊先生から相談があるからとのお葉書を頂いて伺つたところ、今まで『哲學研究』の編輯をしてをられた服部君がやめられるに就き、私にそれを續けて貰へないかとのお話である。その時、先生は、自分は身體が弱く、他の諸教授のやうに多くの役に就くことが出來ぬ爲、せめて自分の出來ることとして『哲學研究』編輯委員になつてゐる。併し、それには實際の助力者が必要である。それを私が引受けるなら今後も委員を續けてゆくが、もし私が辭退すれば自分もやめるといふ御意向を洩らされた。私はこの先生の最後のお言葉にのつびきならぬものを感じてお受けしたのである。といふ意味は勿論、私にその樣な仕事が出來ると思つたからではなく、まして先生が私を有能と評價されたなどと自惚れたわけでもない。たゞ私が引受けなければ先生がやめられる。先生が編輯をやめられれば一體『哲學研究』はどうなるのだ！　私はたゞ先生に編輯委員を續けて頂きたい一念で、自分には才能もなく、興味も無い雜誌の編輯といふ仕事を始めることゝなつたのである。

併し、實は私は『哲學研究』を所謂雜誌とは考へてゐなかつたし、今もさうである。一般的に言つて部厚い單行本よりも珠玉の短論文に時代を劃する研究が盛り込まれる。『哲學研究』はそのやうな日本の哲學思想誕生の器である。また、外國から日本の哲學の代表的な動きを求められた時、「これを！」と言つて差し出せるものとして『哲學研究』を存在せしめなければならぬ。これが私の念願であつた。田邊先生は一旦依頼された以上、一々の細かいことなど何も仰有らず一切を私に一任された。それだけにまた、私は自分の計畫はすべて先生の御同意を得た上で實行に移したのであるが、何と言つても一番困難なのは立派な原稿を入手することであつた。私としては各號に必ず京都哲學會の委員が執筆しそれによつて哲學界の最高水準を示すと共に、大學卒業間もない人々に發表の機會を與へて研學の勵みとしたいと念じたが、事實はそれが容易なことではなかつた。當時は大學の先生も今程經濟的にやり難い時代でもなかつたし、何々委員會と稱するものも餘りなかつた時節であつたから、一年か二年に一度、本格的な論文を發表することは學者の義務であり、それの出來ぬ位なら教授をやめたらよからうといふやうな過激（？）な思想をもつて交渉しても事實はどうにもならなかつた。たゞ西田先生に對しては一度だけお願ひに上つたら「出來たら渡す」と一言仰有つたが、これはほんたうに嬉しいお言葉であつた。慥に論文といふものは他から乞はれて書くものではなく、自ら自分の問題を日夜追求して、その成果を世に問ふ可きものである。先生からは二つ頂いた。一つは「哲學論文集第四補遺」であるが、あれは最初「國家と國體」といふ題であつたのを、當時右翼の人達から京都哲學がにらまれてゐた爲、無用にそれらの人々を刺戟してもとの配慮からあのやうに目立たぬ題名に變更されたのである。今一つは「數學の哲

學的基礎附け」であるが、それに就ては「今は數學者や哲學者には分らなくとも私は深く後日に期待するもので御座います」といふお手紙を頂いた。田邊先生からは「實存概念の發展」を頂いたきりであるが、その點に關しては、此處に私信を公にすることに就き先生のお許しを願ひたい。即ちそれを說明して「小生の頭の中には今問題の切變へが起つて居るので後から後から疑問に追はれ、晝間の昂奮が夜に續く爲不眠に惱まされて居ります。學校の用事が漸く果せる狀態で、雜誌の原稿はそれが片附くまで起草の餘力がありませぬ。乍遺憾當分斷念して頂く外無い次第です。御迷惑重々申譯ありませぬが御諒恕を希ひます。何卒御宥免下さい。」と認められてゐる通り、學徒出陣と共に先生の御苦惱は深刻を極めたのであり、それが大學最後の御講義となり、昭和十九年十月廿一日の京都哲學會公開講演の「懺悔道」となつたのである。さうして、それを『哲學研究』に頂けなかつた理由は、「『哲研』へは甚だ義理惡く感じますけれども、事情が變り單行本として一日も早く出したい氣になつたので御勘辨願ふことに……」とのお手紙に書かれてゐる通り、寸時も早く廣く一般人士に示したいとの憂國の御心から、それを專門雜誌に發表することを斷念されたものと拜察申上げてゐる。その他の諸教授からは遺憾乍ら餘り積極的には協力して頂けなかつた。たゞ自ら編輯に當られたことのある植田藤藏教授は常に同情を與へられ、御無理お願ひすれば必ず書いて下さつたし、島教授も一定の間隔をおいて依頼すれば快く引受けて下さつた。山內教授は、もし私の記憶に間違ひがなければ私が編輯に當る以前の數年間は執筆されなかつたと思ふが、思ひ切つて虎口に飛び込んで行つたら早速快諾され「都市國家の成立」を書いて頂くことが出來て嬉しかつた。それと山內教授に就いては一つ非常に印象的な思ひ出をもつてゐる。それは、原稿を自ら廻屋まで持つてきて下さつたことである。そんなことは何でもないと、ひとは思ふかも知れない。併し寢ても醒めても編輯に苦しんでゐる者には、閉切り前に自分でその原稿をわざわざ持參され、上りもせずにそれだけ玄關さきで渡して歸られるといふことは稀有なことである。事實、他にはかういふことをされた教授は一人もなかつた。その時は、あの平常服裝など無頓着な方（どうも失禮）に、こんなにもきちんとした一面がおありだつたかと、感動した。編輯は全く苦しい。併したしかにそれは人生修羅であり、人間研究である。そこから京大哲學科教授人物評論も不可能ではないし、その爲の文獻（？）も全部手もとに大切に保存してゐるが、それには差し障りのある方々もあるかと思ふので控へておく。たゞ一つ。矢田部教授のところへ期日に頂きに上つたら、もう少し待つてくれ、書き上げるからとて、私を待たせておいて擱筆されてから、逆になつた頁番號をそのまゝ、自分で讀み返しもせずに渡されて「君！頁を戻しておいてくれ給へ。」

田邊先生は昭和廿年二月初に停年で退官され、編輯委員もやめられることゝなつた。その時私は言葉を盡して共に辭めさせて頂きたいと願つたが聽き屆けて頂けなかつた。新しい編輯委員は西谷教授であつたが、同氏からは私に對して一言も續けて

頼むと仰有つて頂けなかつたことが私にはとても淋しく、なさけなかつた。併し、同氏の下に編輯を續けることゝなつてからも、私は今迄同樣、必ず同教授の御意見を伺つた上で計畫をし、實行した。もし昭和廿一年一月號以後において行つたことに大した過ちがなかつたとすれば、それは全く同氏のお蔭である。實際、西谷教授の氣宇の大きさと、學問に對する深い御理解には常に頭の下る思ひをした。私自身は、その後も編輯方針はべつに變へなかつたが、たゞ哲學と特殊科學の連結をもつと緊密にしようとして、京大理學部の桑田薈備名譽教授や東北大醫學部の本川教授を始め、理、醫、法などの方々に執筆を願つたことが多少特色ある行き方であつたと思ふ。併し、それよりも編輯そのものを如何に續けてゆくかといふことこそ當時の重大な課題であつた。私は西谷教授の御意見をも體して、『哲學研究』をどこまでも純學問的な論文の發表機關として死守した。併し、そのやうにして論文の內容は從來の行き方を堅持しても、物資の缺乏と統制の爲、雜誌そのものの發行が非常な困難に陷つた。その爲一時休刊といふ話さへ出たし、合併號を作つて號の遲れを取り戻さうといふ意見もあつた。併し、學術雜誌には發行の遲れといふこと自體はそれ程問題でなく、また戀て時節當來と共に發行回數を增してもとに戻すことも出來ようとの西谷氏の御見解に私も同感して其の儘で續けたのであつた。それが今日編輯者に非常な御迷惑をおかけしてゐるやうで洵に申譯なく思つてゐる。殊に、昭和十九年九月から廿年九月までは一冊も出てゐないが、この點に就いてだけは一言辯明させて頂きたい。といふのは、私自身その期間決して編輯をやめたわけではなく、怠けたつもりでもない。それどころか、事情がさうであつただけに一層上野君とも色々と相談したし、弘文堂の關根敏氏とも喧嘩を繰り返し乍ら二人で印刷の實現に努力した。少くとも月に數度は弘文堂に赴き、空襲警報を聞き乍ら二人で色々と工夫したのである。さうして來月こそ、來月こそと希望を持ち乍ら遂に敗戰までどうとも致し兼ねたのである。この事情だけは知つておいて頂ければ幸である。なほ、弘文堂には關根氏の下に『哲學研究』の係りがあるが、鈴鹿幸保氏がそれに當られて以來、常に詳細な連絡をして頂き、私共として非常に仕事がやり易くなつたことを此處に明記して謝意を表したい。兎も角『哲學研究』編輯の仕事は海中に沒してゐる氷山のやうなものである。どれだけ多くの努力が人目に觸れずになされてゐるかわからない。永遠に無に歸した努力といふ言葉に接する毎に、私は何時もあの一ヶ年を生々しく想起する。勿論歷史において永久に消え去つた多くの偉大な結果なき努力に比しては、このやうな個人的體驗は、それを類比するだけでも笑止千萬なことではあるが。

私は或は私自身の苦勞を語り過ぎたかも知れない。併し、私は今更過去の事柄に對して同情を求めるつもりはないし、苦勞をしたとすれば私一人ではなく、『哲學研究』創刊以來の編輯者が皆それを體驗し乘り越えてきたのである。私達としては、同情を求めることよりも、このやうにして礎き上げられてきた傳統ある『哲學研究』が今後一層の發展を遂げることを念願す

る。幸にして井島勉教授は非常な熱意をもつて編輯を主宰され、三村勉君は一方ならぬ努力をもつて實際に當つてをられる。それは最近の『哲學研究』の一册を手に取る者が等しく認めることゝ思ふ。あとはたゞ内容そのものである。歴史を誇る我々京大哲學科出身の一同は、その傳統を辱しめぬ爲に一層の協力を致さねばならぬ。さうして、出來ることなら、『哲學研究』を單に京都哲學會の私有とすることなく、昨年誕生した日本哲學會の實際上の機關誌として發展させる可きではなからうか。現在の經濟情勢や出版事情において『哲學研究』のやうな雜誌の計營は容易なことではないであらう。併し、日本にも一つ位、純學術的な哲學雜誌があつていゝ筈である。否、なければならぬと信ずる。今更、市井の一般雜誌の行き方を取り入れて、それによつて雜誌が存續したとて、それがどれだけ日本の文化に貢獻するであらうか。我々はどこまでも純粋な學徒でありたい。眞理の使徒でありたい。日本の哲學者一同がその研究に精進し、立場や學派や學閥を超越してその學術論文を『哲學研究』に發表するなら、『哲學研究』は自ら自己を存續し、發展させるであらう。京都哲學會もそれらを受け入れるのを拒むほど狹量ではない筈である。思ひ出を綴る可きこの短文にこのやうな希望を述べることは僭越かも知れない。併し、私共編輯に當て携つた者共は今もなほたゞ只管子供の健かな成長を念じつづけてゐるのである。

終りに女房役としてその溫和な性格で終始私を助けて下さつた上野照夫君にこゝで深い感謝を表することを許して頂きたい。この稿の筆を取つた時は、何を書いたらいゝのか分からなかつた。併し、書き出してみれば書き留めておきたいことが鬱勃として腦裡に湧き出てくる。併しもうこの邊で筆を擱かう、幾多の思ひ出を胸に祕めて。

――一九五一・一・二一――

『哲學研究』の近情

井島　勉

朝永先生のお話によれば、『哲學研究』の出發當時は、「手習草紙」のやうな輕いお氣持だつたさうである。それでも、雜誌の發行とあれば金庫も必要であらうといふことになつて、當時の助手、植田壽藏先生を同伴されて、夷川あたりへ木箱を買ひに出かけられたといふやうな逸話も、洩れ聞いてゐる。

それから三十五年、たゆみなく『哲學研究』は續いた。手習草紙どころか、堂々たる學術雜誌として學界に光彩を放つて來た。歴代の編輯擔當の方々の御苦心もさることながら、執筆の人々の努力と業績も偲ばれるのである。

昭和二十二年以來、委員會の命によつて、私が編輯の責任を負ふことになり、現在に及んでゐる。前任の西谷啓治教授、更にその前任の田邊元教授のやうな、哲學全般にわたる廣く深い見識を持ちあはさぬ私であるから、大過なきを期するために、できるだけ委員會の協力と鞭撻を仰ぐことにしてゐる。しかし私はいはば名義人であつて、實際に編輯のあらゆる勞苦を背負

つてくれてゐるのは、初めに小田武現關學講師、現在は哲學教室の三村勉助手であり、庶務會計は以前から山內得立教授の責任の下に上野照夫講師が擔當してをられる。

古く尊い傳統を護ることは、決して容易な事柄ではない。諸先輩によつて築かれた孤高なる學術的水準を堅持することと、一般讀者層の要望に應へることとの調節に、常に意を用ゐなければならない狀態である。編輯の根本方針は、繼承したままを踏襲してゐる。ただ折にふれて學界の展望を載せ、責任ある書評の類をふやして、讀者の便益に供することとした。外國の學界との聯繫を意圖して、英文の要旨を揭載し始めたが、すでに一部の好意ある反響を得てゐる。

學術誌の使命から考へて、原稿枚數に制限を設けることは適當ではない。しかし、やむを得ない頁數の不自由を最大限に活用するためには、特別の場合を除いて、できるだけ連載を避けねばならぬこととなつた。一日も早くかかる制約が除去される機會の到來が待望されるけれども、當分の間、寄稿諸家の御協力を期待したい。

現今の經濟狀勢下に、類例の乏しい月刊の純學術雜誌を維持することは、もし發行所弘文堂書房の理解と寬容がなければ、殆ど不可能に近い。特に附記して謝意を表したいと思ふ。『哲學研究』は京都哲學會の機關誌であるが、單なる京大哲學科の同人誌ではない。全國的な規模において、廣義の哲學研究に從事するすべての人々に支持されて、哲學界の發展に貢獻すべき光榮ある使命を有してゐる。その達成のために、大方の御援助が祈られる次第である。

——一九五一・一・二〇——

執筆者紹介

山內得立	京都大學文學部（哲學）教授 文學博士
臼井二尙	京都大學文學部（社會學）教授 文學博士
島芳夫	京都大學文學部（倫理學）教授 文學博士
朝永三十郎	京都大學文學部（西洋哲學史）名譽教授 文學博士
高坂正顯	元京都大學人文科學研究所教授 文學博士（哲學）
中井正一	國立國會圖書館副館長
服部英次郎	名古屋大學文學部（哲學）教授
澤瀉久敬	大阪大學文學部（哲學）教授
井島勉	京都大學文學部（美學・美術史）教授 文學博士